

## <研究ノート> 子ども中心とした音楽表現活動を目指して：主体的な音楽表現活動の検討

著者	登 啓子
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	11
ページ	243-249
発行年	2011-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000517/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000517/</a>



# 子ども中心とした音楽表現活動を目指して

## — 主体的な音楽表現活動の検討 —

Aim at Music Expression Activities Performed by Children on Their Own Initiative

Examination of Active Music Expression Activities

登 啓 子

NOBORI, Keiko

### はじめに

保育における音楽は保育者が主体となり進められるのではなく、子ども中心となる音楽でなければならない。しかしながらその方法にマニュアルがあるわけでないので容易なことではない。保育者自身がどのような工夫をするかといった保育をデザインする力、つまり保育実践力が大きく左右すると考える。

平成20年3月に改訂された『幼稚園教育要領』によると、内容の取扱い(3)に「他の幼児の表現に触れられるように配慮したり、表現する過程を大切にすること」が新たに加えられた。・・・改めて表現過程での保育の大切さに着目することになったのは、過度な表現結果への指導と評価を改め、子どもたちの心情や意欲・態度が生き生きと働く表現過程が、子どもたちの資質や能力をはぐくむため大切な保育場面であることを示唆したものと考えられる(野波2009)とあるように、表現過程における保育者自身の意識はもちろん、何よりも表現活動における子どもたちの心情や意欲・態度が充実したものになるような保育の工夫が求められているのではないだろう

か。また、教育要領・表現におけるねらいの一つに「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」が示されているように、これからの表現活動ではその表現過程において子ども一人ひとりの表現が育まれることが求められている。

### 先行研究から本研究へ

先行研究<sup>1)</sup>ではこれからの幼児の表現活動に求められる「自分なりの表現」、「表現する過程を大切にすること」という2つのキーワードについて保育現場における活動事例から検討してきた。その結果、子ども一人ひとりの表現を育成するためには保育者でなく子ども中心とした表現活動の展開が求められていると考えられ、保育者の意識の転換が重要であることが分かった。本論で述べる‘子ども中心’とは、好き勝手に自由にと言う意味でなく、子どもが主体的に中心となるという意味である。

これまでも多くの研究者により具体的な活動が検討され、その多くが創造的音楽活動によるものであり、子ども中心とした指導を展開することはおそらく全ての活動が創造的と

キーワード：自分なりの表現、表現する過程、オルフ

Key words : one's own manner of self-expression, the process to express, orff

言えるだろう。子どもが主体的であるために、創造的であることは欠かせないものであると捉えられる。

そこで本研究では先行研究でも取り上げた創造的な音楽表現活動のひとつとしてドイツの作曲家であり教育者であったカール・オルフの音楽教育の理念と方法について検討する。先行研究ではオルフの教育理念と現行の教育要領には共通性が多く、これからの表現教育に大いに示唆できる教育であることを述べた。本研究ではこれを基に子ども中心とした指導の展開について探る。

## 1. 研究の目的及び方法

### （1）研究の目的

子ども中心とした、子どもが主体的に取り組めるような音楽表現活動を展開していくための具体的な方法と理念について検討する<sup>2)</sup>。

### （2）研究の方法

子ども中心とした活動例として、オルフの音楽教育を取り上げ、本研究のキーワードである「自分なりの表現」、「表現する過程を大切に」から子ども中心とするための具体的な理念と方法について検討する。更に、オルフ指導者のインタビューを行い、2つのキーワードからオルフの音楽教育との関連性を、そして「子ども中心とした音楽について」の指導者の語りからこれからの表現教育につながる考えを導き出したい。

## 2. オルフの教育理念による音楽教育の特徴

### ①オルフ・シュールベルク

オルフの音楽教育とはドイツの作曲家であり教育者であったカール・オルフの理念に基づく教育のことを指す。『オルフ・シュールベルク 子どものための音楽』（全5巻）は

オルフの音楽教育の考え方を基にまとめられた楽譜集である。この教育についてオルフはシステムでもメソッドでもなくアイデアと述べている。シュールベルクは子どもたちが無理なく自然に音楽に関わっていけるようなアイデアが豊富に詰め込まれており、指導者がこのアイデアを基に活動の内容を考え展開するのである。

### ②Elementare Musik

オルフの中心的概念であるエレメンタールな音楽、基礎的な音楽とは決して音楽単独であるものでなく、「音楽」「動き」「ことば」の統合されたものと捉えられ誰もが参加できる音楽である。オルフはElementareな音楽について次のように話しており、その言葉からこの音楽の理念を把握できる。

「それは決して音楽単独ではあり得ません。そこにはかならず動作がともなうものであり、踊りと言葉がついているものであって、それは誰でもみずから演奏できる音楽であり、決して聞き役にまわる音楽ではなく、弾き役に加わる音楽なのです。・・・」

## 3. オルフの理念が表現教育に示唆するもの

先行研究でオルフの考え方にはこれからの保育に示唆できる点が多くあることを述べた。ここではその内容を整理し、示唆するものとしてまとめたい。

### ①コミュニケーションとしての音楽

シュールベルク作成における子どもとのやり取りについてもコミュニケーション体系という意味で興味深く、シュールベルク自体がコミュニケーションしながら音楽できるように作成されている。オルフの活動では保育者

対子どもによるコミュニケーションだけでなく、子ども同士によるコミュニケーションの場面が多くみられる。このことは「他の幼児の表現に触れる」といった教育要領で重視されている事項と重なる。

### ②遊びの視点での展開

シュールベルクには言葉遊びの中のメロディーやリズムを練習することから始めており、オルフが遊びに着目したのは子どもたちの音楽的な芽生えが「遊び」の中に存在すると確信したからと言われている。子どもの中から生まれるものをアイディアとして行うため、子どもが無理なく取り組める音楽なのである。遊んでいて気づいたら音楽していたという感覚を持たせるのもこの教育の特徴であるとする。

### ③総合的な指導

オルフの活動では子どもの中から湧いてくる素材を即興的に発展させる即興活動が特徴的である。オルフの活動は「アイディア」を大切にすることから、自由に総合的視点から多様な素材を用いて活動を組み立てることができる。教育要領における「幼稚園教育の基本」には幼稚園における教育は「遊びを通しての総合的な指導であり」と示されているように表現活動においても遊びを通しての総合的な視点が求められているが、その具体性が求められ、オルフの教育から導き出すことができると思われる。

以上3点が先行研究のまとめであるが、他に次のようなことが考えられ、4点目として挙げる。

### ④誰もが参加できる音楽としての工夫

シュールベルクではオスティナートの多用や子どもたちが容易に取り組めるオルフ楽器の使用など、誰もが参加できる音楽としての工夫が多い。例えば、オスティナートとは同じリズム、メロディーを繰り返すことであるが、子どもたちの身近にある言葉によるオスティナートを用いることで楽しみながら取り組むことができる。言葉にはリズムを持っているため、難しいリズムパターンであっても子どもにとって身近なものであればあるほど無理なく容易である。例えば、譜例1のような難しいリズムでも子どもたちにとって身近な言葉（スキップやロケット等）で唱えながら行うことで、容易に叩くことができるようになる。

・ ・ 譜例1 ・ ・



## 4. 活動例についての検討

オルフの活動で使用される曲はシュールベルクの曲だけでなく、童謡、わらべ歌、子どもの歌、指導者によるオリジナル曲など幅広い。研究発表<sup>2)</sup>ではシュールベルクの曲による展開とシュールベルク以外の曲による展開の二つを活動例として挙げたが、ここではシュールベルクの曲による展開のみ挙げる。この活動は週1回のペースで1回50分を計4回行った内容である。

### (1) シュールベルクの曲による展開

この事例で扱う曲は「子どものための音楽」に掲載されている曲を移調し用いたものである。歌詞は指導者がオリジナルでつけ、伴奏パターンについてもシュールベルクを参考に

子どもたちが無理なく取り組めるようにアレンジし用いたものである。対象は5歳児である。

・ ・ 譜例 2 ・ ・

テーマ曲



(作成：登)

・ ・ 譜例 3 ・ ・

オスティナート例①



オスティナート例②



・ ・ 活動の流れ ・ ・

(準備)

- ・ 動物園について皆で話す
- ・ 子どもたちから出た動物をリズムにして楽しむ。
- ・ テーマ曲にダンスを考え、踊りながら歌う。
- ・ 動物園チケット ‘パーゲー’ の暗号※を覚える。

※身体じゃんけんによる ‘パー’ と ‘ゲー’ の習得と木琴の奏法を結びつける。

(展開)

- ・ フラフープで作ったパーゲーの橋を渡る。パーゲーの暗号がオルフ楽器（木琴）でできることに気づく①。

- ・ テーマ曲を階名唱する。ドレミを身体表現で楽しく覚え、メロディー奏に挑戦する。
- ・ 動物をイメージしたリズムをオスティナート②にして手拍子する。さらに小打楽器の演奏に発展し、歌の伴奏にする。

※譜例3はオスティナートの一例である。

(発展)

- ・ 歌唱+①+②にしてアンサンブルにしてみとめる。

## (2) 考察

上記で取り上げたシュールベルクの曲による展開とシュールベルク以外の曲による展開（研究発表で紹介した）の2つの事例から考察する。

考察方法は「自分なりの表現」、「表現する過程を大切にする」2つのキーワードから子ども中心となる理念と方法を探る。

### ① 自分なりの表現

指導者による創造的な仕掛けにより子どもたちが自分なりの表現を探求している姿が多く確認できた。そこで注目したことは、指導者が様々な表現を提示している場面を多く抽出できたことである。多くの表現の仕方を見ることが、他の表現を探そうとする空気が子どもたちの間でできあがっていたようにさえ感じる。創造的工夫が自分なりの表現を生み出す重要な環境と言えよう。

### ② 表現する過程を大切にする

オルフの過程とは「探求」と「経験」である。子どもたちが表現する中で、音や音楽を追及すること、つまり創造的な音楽活動の過程を経験することこそがこの教育の魅力であ

り、このような場面が多く抽出できた。例えば、事例にあるようにパーガーの身体じゃんけんの動作を動きとして、音楽に結び付けるアイデアを子どもたち自身が発見することこそオルフの経験の意味があると感じる。

またそのプロセスの中で、保育者は急がず、常に待つ姿勢を保っていた。「探求」は「経験」することを積み重ねることで生まれる。探す過程を楽しんだ子どもたちは、さらに新たな表現を探しはじめる。表現する過程を楽しむことが大事だと言える。

オルフの活動では即興表現が多く含まれるが、単に自由に好きなようにでは、子どもが満足できる表現ができないことも予測される。それを支援できるような工夫が多く見られたと言えよう。自由な空間に加え、その過程を支援する姿勢が新たな表現を生み出す力となっているということである。

以上二つのキーワードから考察することで、オルフの活動からは子どもを中心とした活動へ、主体的な表現へと展開していく具体的な方法やアイデアを見つけることができたのではないだろうか。

## 5. 指導者のインタビューを受けて

本研究にあたり、オルフの音楽教育を担当している指導者(指導歴10年)にインタビューすることができた。インタビューを通して、2つのキーワードとオルフの音楽教育との関連性について更に追及したい。指導者に2つのキーワードについて尋ねた内容を以下にまとめた。

### ① 自分なりの表現

「自分なりの表現を生み出すための指導者の役割とは、個々の発言を否定せず、瞬時に

判断して、音楽の一部に取り入れることだと考える。つまり、子どもに伝えるということである。子どもは認められることで指導者や周りの環境に安心感を持ち、コミュニケーションが取れるようになる。保育者対子ども、子ども同士のコミュニケーションをとれるようになることがハーモニー、音楽を作り出す。良いハーモニーを生み出すことで協調性が生まれ、さらに音楽を楽しむ心を育てることにつながる」と言う。自分なりの表現を育てるためには保育者の瞬時に反応、判断できる力がまず求められるということであろう。このことは子ども一人ひとり、つまり個人を尊重するという考えがベースにあるからこそであると思う。

また、音楽活動において自分なりの表現を生み出すためには、「音楽で満足する気持ちを育てることが大切である」と言う。ただ自分なりの表現を楽しむだけでなく、五感を働かせて、歌う、動く、聴く、鳴らす、音やハーモニーを感じる、リズムを感じる、メロディーを感じるといった‘感じる’力を育て、‘遊んでいたら音楽ができていた’といった体験ができるのがオルフの音楽教育の特徴であり、この教育ならではの魅力と意味づけられる。指導者の「音楽で満足・・・」という言葉からオルフの魅力を再確認できた。

### ② 表現する過程を大切にする

表現する過程において、どのようなことを配慮していますかという問いについて、「子どもたちが飽きずに取り組めるような課題を常に与えている」と言う。「例えば、即興ではただ自由にという言葉かけだけでなく、例を多く与える。そうするとそれとは違ったものを子どもたちが探し始める」。このことにつ



いては、先の実践の考察でも述べたことと同様であると言え、オルフの音楽教育がプロセスを大切にする教育であることを再確認できた。

また、表現する過程において‘繰り返すことの楽しさ’を指導者は協調する。「繰り返すことは大人が思っている以上に子どもたちは楽しむ。しかしながら、つまらなければ苦しい。繰り返すことは楽しさがあれば苦しくない。むしろ楽しい」と言う。このことは同じような内容を毎週行う場合でもアイディアを加え、アレンジし工夫して行うことが大切であるということであろう。

表現する過程において、常に導き、支える存在でなければならないと言う。同時にこの‘導く’ということの難しさについて、子どもを見ていないと導くこと、ましてや音楽へ導くことは難しいと語る。導くということは、指導者自身探求し続けることであると思う。加えて、音楽へ導くための努力が指導者自身の音楽力に求められていることを感じた。しかしながら、音楽が苦手な保育者であっても、子どもを見つめることで次にどのような援助がその子どもに必要なのかということはおのずと見えてくるのではないだろうか。何故ならオルフの言う‘全ての子どもたちが参加できる音楽’がオルフの音楽であり、子どもだけでなく指導者も一緒になって楽しめる音楽と結論づけることができる。

以上、インタビューを通して、オルフの音楽教育とこれからの保育に求められていることの関連性をより具体化できたのではないだろうか。

## 6. 子ども中心とした音楽表現とは

インタビューで子ども中心となるようにど

のような工夫をされていますか、という問いに対して、‘当たり前のことなので敢えて考えたことがない’という言葉が印象的である。事例の考察やインタビューを通して、‘子ども一人ひとりをよく見つめ、子どもの表現に気づき、音楽表現へと導く’この一連の流れが指導者の教育のベースにあることを感じる事ができた。この考えは表現活動に限らず、すべての保育に当てはまる考えである。指導者の言う‘子どもの表現から瞬時に判断する’力を養うことは決して簡単なことではない。しかしながら子どもを見つめることで思い浮かぶ様々なアイディアこそが保育をデザインする力につながることを、子ども中心の活動を展開するオルフの教育を考察することで確認できたと思う。このことは表現活動のプロセスには常に子どもにとって良い導きとは何かを探し続ける保育者自身の探求心が支えているということである。

子ども中心とした音楽表現活動の方法は今回のオルフの活動以外にも限りなく存在する。他のメソッドや活動事例から子ども中心となる方法などについても探りたい。子どもたちが無理のない自然な形で中心となり、子ども一人ひとりの自分なりの表現を育んでいけるような方法について更に探求していきたいと思う。

## 謝辞

本研究にあたり、インタビューを引き受けてくださったオルフ指導者の先生に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 登啓子「乳幼児期における歌唱活動についての一考察－オルフの理念を取り入れた歌唱活動の事例による検討」帝京大学文学部教育学科紀要第36号 pp43-pp51
- 2) 本研究は国際幼児教育学会第32回大会（2011・韓国釜山慶星大学校）で発表した「子どもを中心とした音楽表現活動の検討」を基に再考し、新たな部分を加え、まとめたものである。

## 引用文献・参考文献

- 文部科学省「幼稚園教育要領」2008
- 厚生労働省「保育所保育指針」2008
- 野波健彦・板良敷敏編著「保育内容 表現」光生館 2009
- 柴田礼子「オルフ研究所 ヘルマン・レーグナー教授にきく」『季刊音楽教育研究』音楽之友社 1990 pp160-166.
- L.チョクシー他「音楽教育メソッドの比較」全音楽譜出版社 1994
- 今川恭子他「子どもの表現を見る、育てる」文化書房博文社 2005
- 石井玲子他「実践しながら学ぶ子どもの音楽表現」保育出版社 2009